

あんげろす

明治時代のキリスト教資料研究プロジェクト

嶋田彩司

松山高吉をご存じだろうか。江戸期末の平田派国学者にして、明治初期のクリスチャンでもある。

徐正敏所長の縁で、たまたまその後裔と知りあった。聞けば大量の資料が未整理のままであるという。そこで数名の仲間とともに共同研究をはじめることとなった。それが標題の当研究所新プロジェクトである。

それにしても、国学からキリスト教へとは、奇妙である。復古神道を信奉した青年が、どんな事件やドラマを経験すればキリスト教徒に転身し得るのか……残された日記や書簡を繙けばその答えがみつかるのだろうか。何年にもわたって詠みためられた和歌に屈折の時点をみいだすことはできるだろうか。手間のかかる作業だが、そんな宝の山に出会えたことは研究者として幸せである。



第 72 号

2017 年 3 月

平均年齢 81 歳の研究会

橋本 茂

2012年、『SCA— その30年の軌跡 —』（キリスト教研究所オケイジショナル・ペーパー14号）を發表した。それは、キリスト教に基づく建学の精神の実現を急ぐあまり、燃え尽きてしまったクリスチャンの若者集団が存在したことを、明治学院大学の歴史に記録しておきたいという思いで、平均年齢70歳を越すSCAのOBが毎週のように研究所に集まり、資料を収集し、整理し、討議し、執筆したものである。それはまた、私たちの「青春の記録」でもある。

この編集会合で、SCA（基督教学生会）のメンバーの多くが教会の牧師や宣教師の勧めで大学に入学し、SCAに入会したことが話題になった。特に、アメリカから派遣された若き宣教師の影響の大きかったことが分かった。さらに、話は進み、当研究所ではヘボン、ブラウン、フルベッキなどの明治期の宣教師についての研究は多いが、戦後の宣教師についての研究は少ないことが問題となった。

そこで、『SCA』の出版での興奮（思い上がり？）と、それで得た自信で、後期高齢者であることを忘れて、私たちは戦後の宣教師の研究、特に明治学院における戦後の宣教師の研究に取り組む決断をした。

最低月一回の研究会「戦後の宣教師研究プロジェクト」が始まった。明治学院にある資料の収集、整理、それによる報告が行われ、戦後の宣教師の性質、役割などが検討された。彼らは、日本の若者の中に飛び込み、サマーキャンプや英語による聖書研究や英会話などを通して、キリスト教を宣べ伝えるために、アメリカから派遣された、若きピチピチしたクリスチャンであった。彼らの多くは、日本での滞在が3年たてば帰国する準宣教師であった。明治学院にもそのような宣教師が多く派遣され学生と親しく交わった。

そんな中で、明治学院に専任として派遣され、明治学院の再建に、また、管理、運営に大きく貢献した宣

教師は、誰であろうかと、私たちは問うようになった。そして、松本亨(1913-1979)に行き着いた。

松本亨は、一般には、NHKラジオ英会話の講師として、また、日本放送協会放送文化賞の受賞者として、日本的に有名な人である。しかし、彼は、戦後、明治学院大学再建のために、アメリカから明治学院に派遣された宣教師であった。ところが、明治学院では、この宣教師としての松本亨の貢献について十分に研究されているとは思えなかった。そこで、プロジェクトのメンバーで話し合った結果、明治学院における宣教師を研究するとすれば、まずは、松本亨の研究であるということになった。

私たちは平均年齢81歳の研究集団であり、多分これが最後となると思うが、その研究成果『明治学院における松本亨』を、研究所のご厚意で、次年度のオケイジショナル・ペーパーに発表させてもらうことになった。明治学院における資料はほぼ収集し、整理も進んでおり、また、私たちの体も頭もまだしっかり(?)しているので、研究所のご厚意に応えることができるかと確信している。

はしもと・しげる (名誉所員)

シカゴにて

中島耕二

空港ビルの外はマイナス 16℃、時折ミシガン湖を渡る強い風に乗って槍のような雪が吹きつける。ここはアメリカ、シカゴ・オヘア空港。1983（昭和 58）年 2 月初めのことである。

イタリアのミラノから帰国して 6 年が経った前年 11 月、今度はシカゴ行きの辞令が下りた。シカゴには出張でたびたび訪れていたが、真冬は初めてである。出迎いのシボレー・カプリス 5,000CC に乗って、ホテルのあるダウンタウンに向かった。途中、夕闇迫るミシガン湖を車窓から望むと、湖面は波の形のまま沖合まで凍っていた。思わず呟いた。「エライトコロニキタナ!」。以後 4 年半にわたるシカゴ勤務がこの日から始まった。やがて、湖の氷も溶けてセント・パトリックス・デーを迎える頃、家族がやって来た。

シカゴでの仕事は、アメリカ・カナダの自動車、鉄鋼、航空機エンジン、発電用ガスタービンの各メーカーを訪問し、自社製品の売り込みと納入製品のアフターケアを行うことにあった。週のうち半分は、ピッツバーグ、クリーブランド、デトロイトの三つの工業都市を UA に乗って飛びまわり、時々ニューヨーク、ボストン、トロントたまにマイアミ、ヒューストン、ロサンゼルス、ポートランドさらにメキシコシティー等を訪問し、ビジネスを通じて北米大陸とそこに住む人々と出会い、身を持って「アメリカ」を体験する機会を得た。短期出張では得られない経験である。

在米中、ビジネス環境は厳しかった。アメリカ経済は赴任当初こそ、長年の「双子の赤字」から抜け出し、第二次レーガノミクスのもと、実質 GDP 成長率も 1983 年 4.3%、1984 年 7.3% と回復基調にあったが、貿易赤字は増大し、やがて日米貿易摩擦が深刻となり、その対策として 1985 年 9 月の G5 で「プラザ合意」が行われ、円高ドル安相場が誘導され、日本からのアメリカへの輸出は大きなダメージを受けた。ちなみに赴任

時 1 ドル 240 円だった為替レートは、帰国する 1987 年夏には 140 円まで値上がりし、大幅な円高になっていた。

日本人の駐在員の多くは、ビジネスおよびプライベートでゴルフをするのが一般的であった。しかし、私は残念ながらゴルフのセンスがなかったので、余暇は長年修業して来た剣道をアメリカ人に伝えるボランティアを計画し、シカゴ市内の剣道クラブで教え、また自宅近くのエバンストン市にあるノースウェスタン大学で 20 人ほどの学生を募集して、剣道部を立ち上げ師範として帰国の日まで指導を行った。ノースウェスタン大学は全米有数の名門校で、特に MBA コースは難関で、修了生の多くが世界のビッグ・ビジネスのエグゼクティブとして活躍している。この剣道部の立ち上げに当たっては、「交剣知愛」（剣を交えて”惜別”を知る）という剣道の教えを掲げた。幸い 30 年以上経った今も教え子の数人とは交流が続き、この教えが守られている。またノースウェスタン大学は、日本人最初の牧師となった沢山保羅が 1872 年に留学した大学でもあり、ここで教えることは感慨も一入であった。

もう一つの余暇の過ごし方は、アメリカ人来日宣教師の調査・研究を行うことであった。学生の頃から宣教師に関心を持ち、研究の真似ごとをしていたが、1960、70 年代はまだ宣教師に関する先行研究も少なく、そのため独学で史料を集め実証研究を行っていた。今回アメリカに赴任し、現地調査が容易になったことから、在米中に宣教師の史料蒐集をして見ようと考えた。当時、すでに高谷道男先生の『ヘボン』『ブラウン』および『フルベッキ』の各書簡集は出版されていたが、この三人以外の本学に関係する宣教師については、ほとんど研究されていなかった。そこで、初代宣教師に続く次世代の代表であるウィリアム・インブリー博士を中心に調査を始めることとした。

早速、本学図書館史料室にインブリー博士の帰国後の住所を問い合わせたところ、暫くして「不明」との返信が届いた。あれだけ明治学院はもとより、日本の

プロテスタント伝道に功績を残した人物について、フォローがされていないはずはないと思ったが、返事を戴いたことに感謝し、ここは自分で調べるしかないと考え直した。当時はインターネットのない時代、主な調査方法は電話と手紙、それに現地に行って足で稼ぐ目で確かめるしかなく、いくら時間があっても足りなかった。ましてや、仕事の余暇としての調査・研究であり尚更のことであった。

インブリー博士はプリンストン大学とプリンストン神学校の卒業生であったことを頼りに、赴任最初の夏休みにプリンストンに出掛けた。ニューアーク空港からレンタカーをして、USハイウェイ・ルートワンを南に43マイル下り、プリンストン大学に着いた。インブリー博士の史料はMudd Libraryに眠っていた。ここから芋づる式に関連史料の所在地が分かり、以後手紙で史料を取り寄せ、或いは休みを利用して関係図書館、教会および歴史協会等に史料蒐集に出掛けた。こうして、他の宣教師も含め沢山の史料を集めることが出来たが、肝心のインブリー博士の帰国後の住所は、在米中には遂に見つけることは出来なかった。

1987年夏、アメリカ勤務を終えて日本に戻った。早速、白金の旧本館一階の片隅にあった本学図書館史料室を訪ね、インブリー博士に関する史料を閲覧させて戴いた。そこで目にしたのは、インブリー博士が帰国後シカゴに住み、隣町エバンストンの病院で亡くなったという文章であった。そして、博士夫妻の墓所もエバンストンにあることが分かった。そこは何と、アメリカ在勤の4年半、通勤のために朝晩車で通り過ぎていたハイウェイのすぐ脇の墓地であった。

なかじま・こうじ（本学客員教授・協力研究員）

1920年代、中国キリスト教知識人は反キリスト教運動からの批判に立ち向かい、国内において積極的にキリスト教本色化運動を提唱したのである。当時の教会の指導者や知識人たちは、キリスト教が国家再建のために、具体的に貢献できる可能性を模索していた。つまり、「洋教」と呼ばれるキリスト教が、どのようにして中国文化との関連を見出すことができるのか。結局本色化運動の指導者たちは、福音と文化、中国伝統文化とキリスト教信仰を深く関連づけることによって、様々な意義ある本色化の討論と実践を行った。この時期において、中国におけるキリスト教本色化の高度発展期とも言われる。

1949年中華人民共和国成立以後、中国キリスト教会は社会変化に適応して、自治、自養、自伝の理念の下に三自愛国教会を成立させた。1950年代～70年代において、文化大革命の政治的、時代的な影響により、キリスト教の本色化についての議論や研究は容赦なく中断してしまった。中国国内の学术界が再びキリスト教研究に注目したのは、1978年の改革開放の政策実施以後であり、中国国内の學術分野において新しい研究の局面が開かれ、キリスト教についての研究も盛んになってきている。

1979年以後中国政府の宗教政策の緩和によって、多くの中国民衆が教会の礼拝に訪れ、活気の漲っていた凄まじいキリスト教運動が展開された。中国政府の統計によると、現在の国内のキリスト教信徒は約2300万人であるが、西洋の宗教学者はこの数字の三-四倍以上であると推測した。これこそ、キリスト教が中国の社会に根ざし、多くの中国の民衆に受けられ、本色化の最も良い成果と認められる。

しかし、その一方、中国におけるキリスト教本色化について幾つかの研究課題が残っている。先ず、全て

の民族は各々自分の本色化神学を建設しなければならない。なぜなら、全ての民族は独自の歴史的背景と社会的状況を持ち、キリスト教の福音はこれら異なる社会問題に应答すべきだからである。多くの国や地域によって、独自の神学を打ち出してきているが、例えば南米の「解放神学」、韓国の「民衆神学」、台湾の「郷土神学」などが挙げられる。このような独自の神学によって、神学の豊かな多元化的状況が生まれている。従って、現在の中国のキリスト教会も独自の本色化神学を形成することが大きな課題だと言える。「自治・自養・自伝」の三自の他に、成熟した教会は、自らの神学を発展させる能力を持つべきであり、それによって、キリスト教が中国の伝統的な文化と宗教との対話の道も開かれるであろう。しかし、中国の主流思想と文化は、漢民族の文化であるが、中国本土において独自の文化と思想を持っている 55 の少数民族が漢民族と共存している。これらの非主流思想の存在を完全に看過するならば、中国文化と思想の真実性を見失う可能性がある。従って、中国におけるキリスト教本色化を考察する際に、それらの少数民族の独自の思想も視野に入れなければならない。その結果、キリスト教本色化の多元的な姿が現われるであろう。

また、キリスト教は本色化する際に、完全に相手の文化、思想を受け入れ、或いは排除ではなく、その前に、慎重に検証しなければならない。この作業に最も適する者は、外国人宣教師ではなく、現地のキリスト教指導者である。なぜなら、彼らは自分の社会状況、文化、思想、儀式に含まれた意義を一番深く理解できているからである。本色化のプロセスに関する如何なる決定、変化についても、現地のキリスト教指導者の参与は、絶対的不可欠である。現在の中国のキリスト教指導者は、その役割を果たすべきであり、排外主義を取るのではなく、批判的な立場を取って、キリスト教の豊かな内実を中国の社会と文化に融合させ、中国にとって相応しい、新しいキリスト教の意味を与えるべきである。

更に、東アジア（日本、韓国）のキリスト教会は、中国のキリスト教会と同じようにキリスト教の本色化の道を辿ってきたが、それぞれの異なる結果が現われた。日本、韓国のキリスト教会はどのように「自治・自養・自伝」を実現したのか、どのようにキリスト教を現地の文化と融合させてきたのか、といった問いに対して、中国、日本、韓国のキリスト教会の本色化へのプロセスを比較研究しながら、東アジアにおけるキリスト教本色化の特徴に対する共通認識を深めることを通して、如何に多元主義世界において平和共存しつつ融和な文化の寛容性を形成できるかということについて、今後の研究課題として探求を深めていく所存である。



中国の本色化教会（上海・鴻徳堂）

じょ・いもん（協力研究員）

昨年 11 月に学生たちとクッキング・リトリートを行った。朝晩の黙想以外はひたすら料理をして食べる行事なのだが、この時は平飼いの地鶏を入手し叫化鶏という中国江南地方の料理を作った。

この鶏をシメて料理をしたのだけれど、最初に調理のために鶏を籠から出したところ、ひとつ、卵を産んでいた。しかも有精卵である。

雌鶏にとっては日常なことかもしれないけれど、今際の際まで次の世代に命を繋ごうとしていたことをみんなで目撃し、生きようとする逞しさへの感銘とそれに終止符を打つことへの罪悪感との入り交じった感情を抱いた。

鶏は自分の運命を悟っているのか、それとももともとおとなしいのか、首筋に刃物が近づいても暴れようともしない。刃先で探り当てた頸動脈を切ると血が噴き出し、一緒に切れた気管からは溜息のような空気の漏れる音が聞こえてくる。2、3分で絶命した鶏は熱湯につけて羽をむしるとスーパーでよく見かける肉の姿に変わっていった。

まだ温かい弾力のある内臓を取り出している脇で、一人の学生がむしった羽毛と色鮮やかな紅葉を丁寧に小鉢に敷き詰め、そこにきれいに洗った卵を入れて厨房の片隅に飾り、つぶやいた。「お母さんをありがとう。大切においしく食べるからね。」他の学生たちも、それを聞いていたのか無言のまま調理作業を続ける。

中に詰め物をしてから陶芸用の粘土で包み、オーブンで2時間近くかけて焼き上げた鶏は、ひび割れた陶土の下にまだ隠れているにもかかわらず、湯気を上げて鼻腔を心地よく刺激し、空腹であったことをみんなに気付かせる。

食卓を囲む参加者にはクリスチャンはひとりもいなかったけれども、厳粛な空気のなか誰もが自然に手

を合わせ、感謝の祈りに呼応して「アーメン」と嘯みしめるように呟いた。

取り分ける先から黄金色のスープがあふれ出てくるこの料理がおいしくない訳はなく、すぐに笑顔の輝く賑やかな食事が始まる。そして誰ともなく先ほどの卵の話の始めた。「命をいただいた以上は残さず鶏を食べないと思うけど、あの卵と一緒に食べるのは抵抗があるな。」「でも親を奪ったわけだから卵も食べる責任があるんじゃないかな。」「一緒に料理しなければいいんじゃない。」

他の話題に中断されながらも食事の間続いたこの議論を聞いて、キリスト教では乗り越えられたことになっている旧約の食物規定を思い出した。肉は食べるが血は食べない、親子同日に屠らない、親ヤギのミルクで子ヤギを煮ないなど、「食材」の問題として捉えると古くさいナンセンスな規定にも思えるが、あらゆる生き物が神から与えられた命を繋いでいくことと人間が屠って食べることとの間の線引きに関する繊細なバランス感覚として捉えると、今日でも新鮮な問題提起に思えてくる。

ちなみに上述の議論となった卵は、翌朝ソバ粉のガレットに載せられ誰かのおなかに収まった。かたちを変えて別の命を生かすことになったのである。

うえき・けん (主任)

研究所活動（2017年1～3月）

戦後の宣教師研究プロジェクト研究会

第7回

開催日時：2017年1月19日(木)13:00-

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

第8回

開催日時：2017年2月24日(金)13:00-

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

2016年度キリスト教研究所3月研究会

開催日時：2017年3月7日(火)15:00-

開催場所：明治学院大学白金校舎本館1307教室

発表①

「D・ボンヘッファーにおける共同体の霊性」

発表者：岡田 仁（キリスト教学非常勤講師）

コメント：豊川 慎 客員研究員

発表②

「宗教とジェンダー、フェミニズムからのチャレンジ」

発表者：香山洋人（キリスト教学非常勤講師）

コメント：植木 献 主任

3月研究会後の懇親会

開催日時：2017年3月7日(火)18:00-

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

新着図書

- ・『福音と世界』No.1、新教出版、2017
- ・『福音と世界』No.2、新教出版、2017
- ・『福音と世界』No.3、新教出版、2017
- ・『パトリステイカー教父研究一』第20号、教友社、2017
- ・『Reallexikon für Antike und Christentum』2016
- ・『エイレナイオス1』大貫隆訳、教文館、2017

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第72号

2017年3月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩